

日本語教室活動の中の百人一首かるた～その可能性～

淡江大學日本語文學系 内田 康

1. 私が台湾の学生と「百人一首」かるたを取るようになるまで

皆様こんにちは。本日の研修会の講師を務めさせていただきます、内田と申します。実は私、このようなお役目の拝命は初めてなのですが、今回、これほど多くの方々が御参加くださったことに驚きますとともに、あらためて深く感謝申し上げる次第です。

さて、私が本日お話しするテーマは、日本語教育における教室活動の中に、「百人一首」（「小倉百人一首」とも言います）のかるた遊びをいかに取り入れるか、或いは、そんなものを取り入れることがそもそも可能なのか、といった内容になろうかと存じます。そして、そのためにどういう流れで説明を進めていこうかと迷ったのですが、やはり、私自身と「百人一首」、もしくはそれを用いた「競技かるた」との関わりを、自己紹介を兼ねて皆様にお伝えすることから始めるのが一番と考えましたので、そのようなかたちでさせていただくことにいたします。

私は、日本を離れて日本語教育に携わるようになりましてから、約 20 年くらいになりますが、もともと大学および大学院の時代には、『平家物語』等、中世を中心とした日本の古典文学を、主に研究しておりました。但し、思い返してみますと、そもそも私が日本の古典に関心を持つようになったのは、やはり、高校時代から大学時代にかけての部活動やサークル活動で、「百人一首」の「競技かるた」をしていたことが、大きく影響しているように思います。

ところで皆様の中で、今までに「競技かるた」というものの存在を見たり聞いたりしたことのある方は、どのくらいおいででしょうか？ また、そんなものは全く知らない、という方は？ 「百人一首」と言えば、例えば台湾や中国の皆さんにとっての『唐詩三百首』と同じように、伝統的な詩歌を集めた作品集として、多くの人々が、家庭や学校等で触れる機会のあるものですし、特に日本の場合、それが「かるた」というカードゲームにされている関係で、小さい子どもでも身近に接することができるようになっています。しかし、「競技かるた」となると、事情は少し違ってきます。ほとんどの学校に、野球部やサッカー部やバスケット部、或いは柔道部や剣道部などはあっても、部活として「競技かるた」部があるところは、今も比較的少ないと思います。ところが、私の通っていた静岡県のとある県立高校は、その当時から既に「競技かるた」で全国的に有名でした。因みに、後ほど触れることとなります『ちはやふる』という、東京の「競技かるた」部の高校生たちを描いた漫画・アニメに、主人公たちのライバル校に当たる静岡県の「富士崎高校」という学校が出てくるのですが、そのモデルになったのが私の母校でして、名前もよく似ています。それはさて置き、実は私の場合、「競技かるた」よりは、詩歌としての「百人一首」に対する興味から、その部活に入ることにしたのです。同級生たちはみんな、高校に入ってから始めたにもかかわらず、かなり強い人がたくさんいて、その中には、後に「競技かるた」の

男性部門日本一の「名人」位を三期に亙って務めることになった友人もいます。私も高校在学中、彼にはたった一度しか勝てませんでした。そういうわけで、私は「競技かるた」自体は好きで、大学に進学して以降も、そこにもかるたのサークルがありましたので、そのまま続けはしましたものの、決して強い方ではなく、専ら文芸方面に対する関心がもとで、日本の古典文学を専攻することになったのでした。

その後、縁あって韓国で3年、台湾ではもう15年以上になりますが、大学生たちに日本語を教える仕事に携わることとなり、会話や作文の授業の他、もともとの専門の関係で、日本の古典文学や古典文法の授業も任されるようになって今日に至ります。そしてその授業の一環として、年に一度、「百人一首」かるたを学生に体験してもらい、ということをして、かれこれ20年近くに亙り断続的に実践してきました。例えば、現在の勤務校であります淡江大学では、ここ数年、日文学科4年生の選択科目の一つ、「日本名著選讀(二)」の前期で、「百人一首」を中心とした古典の韻文作品の読解を、古典文法の学習と併せて行なっているのですが、期末テストの前の週に毎年、「百人一首」のかるた取りをみんなでするようにしております。因みに、読解教材としては、輔仁大学の張蓉蓓先生が、今からちょうど十年前の2005年に、致良出版社から出されました、『百人一首』を使用させていただいています。そもそも詩歌の翻訳というのは相当な困難を伴うものですが、この本の場合、「翻訳」や「歌意」の他に、詳細な文法の説明もありますので、一方で文語文法の教科書を併用して文法の基礎を説明しながら授業を進めれば、原文を通しての作品理解が可能となるのです。また張先生によれば、この本は最近デジタル版ができたとのことですので、関心がおありの方は、ぜひ御覧いただきたいと思います。なお、本日の研修会では、時間の関係上、甚だ遺憾ながら、「百人一首」の古文教材としての側面に触れることはできません。

<http://ebook.hyread.com.tw/bookDetail.jsp?id=81210>

とはいえ、こうした日本古典文学の授業の一環として行う「百人一首」のかるたの場合、「競技かるた」の形式でやるわけにはいきません。「競技かるた」につきましては、この後、ルールや試合のポイントを御説明しますが、基本的に、百枚の札を全て覚えていることが前提となるわけですし、実はこれは、和歌の内容に関しての数ヶ月間の学習とは、結びつきが強くありません。御覧いただいた映像のように、競技では、和歌の前半であります「上の句」の最初の数文字を詠み上げただけで、札が払われていますが、古典文学の授業の中でできるのは、せいぜい和歌の後半に当たる「下の句」まで聞いてから札を探して取る、というくらいのことでした。ですから、私は長い間、「百人一首」のかるたは、こうした形式で、古典文学の授業の息抜きとして年に一度だけ行う以上のこと——例えば「競技かるた」とか、或いは古典の授業以外の日本語関係の授業で取り上げる可能性など——については考えたこともありませんでした。

ところが意外にも、今から二年ほど前のことですが、本学科の何人かの大学院生が私に、「競技かるた」に関心があるので同好会を作りたい、ついてはその指導をしてほしい、と言って来たのです。それは、2007年の暮れから連載が始まり、2009年には「マンガ大賞」を受賞、2011年以降はアニメ化もされた、末次由紀の『ちはやふる』

(講談社。台湾版は《花牌情緣》のタイトルで東立出版社より刊行。) という漫画の影響でした。本作品は現在、単行本が 29 巻まで出ており、また来年の 3 月と 4 月には実写版映画の公開も予定されている、という人気作です。

<http://chihayafuru-movie.com/>

実は、私自身もこの作品のことはそれ以前から知っていて、内容が自分の高校時代の経験と直接重なるせいで、かなり強い共感を覚えたのですが、日本ばかりか台湾など海外でもそれほどの人気が出るとは思いませんでした。皆様は如何ですか？恐らく、競技自体の特殊性が問題にならないくらい、主人公たちの青春ドラマが多くの人々に訴えるのでしょう。ともあれ、この漫画の登場以来、日本では「競技かるた」に対する関心が、今まで以上に急速に高まっているのは確かなようです。そんなわけで私は学生たちの希望を容れ、「淡江大學歌牌社」が発足することになったのでした。

2. 「競技かるた」のルールについて

ここで一つ、あらかじめ申しますと、台湾で日本語学習者に「百人一首」のかるたをやってもらう際、例えば私の場合は、〈日本古典文学〉の授業の一環として、和歌の意味の理解がある程度進んでから、〈異文化体験〉というかたちで一学年度に一度だけ行うケースと、サークル活動として、最初から「競技かるた」の実践を目標に、週に一回あるいはそれ以上、定期的に行うケースと、目下、二通りのやり方をとっているわけですが、それらの形態はおそらく、ここにお集まりいただいた皆様のうちの多くにとって、直接の参考にはならないことが予想されます。ですから、本日の私の話の本題は、〈日本古典文学〉とは必ずしも関わらない日本語関係の授業で、例えば年に一度ほど、教室活動として「百人一首」を扱おうとしたら、どんな方法が考えられるかという点の一つ。そして、もしもその場で「百人一首」に触れた学生が、その後、継続して自主的に「競技かるた」の体得を目指したいと考えた場合、教師としてどのようなアドバイスが可能かという点の一つ、ということにしようと思います。

と言いますのも、私も一応、日本古典文学を専攻している者としまして、学習者に和歌の理解を促したいという気持ちもあるわけですが、あまりその点を強調すると、それは自分の視野が狭いというものですし、何よりも、せつかく学習者たちが「競技かるた」という道筋を通して「百人一首」に関心を持ってきている以上、その「競技かるた」に携わった経験のある者として、台湾で、それに少しでも興味のある人たちや、またその人たちを指導する立場にある先生方に向けて、限られた時間内で何らかのヒントになるようなお話をしたい、と考えたからです。そういうわけで、本日は、「百人一首」関係の中でもかるた、特に「競技かるた」の紹介を中心にお話しさせていただくことを、皆様、あらためて御了承ください。

さて、そこでその「競技かるた」ですが、「競技」と言うからには、そこには当然ルールが付き物です。現在の日本で「競技かるた」は、「一般社団法人 全日本かるた協会」の定める「競技規程」に則って行われています。

<http://www.karuta.or.jp/>

<http://www.karuta.or.jp/kitei/kyougi.pdf>

この競技規程は、全十九条から成り、その他に解説的〈補足〉を加えた「競技規程細則」もありますが、ここで、競技を行う際に必要な規程を中心に抄出してみます。

- 第一条 競技方法 競技は、小倉百人一首かるたを用い、相対座する二人の競技者の間で行う。
各自、取札百枚のうちから無作為に選んだ二十五枚を持札とし、読手の読み上げる札（以下、出札という）を取り合うことにより、早く持札が無くなった者を勝者とする。
- 第四条 競技線 競技者は、その座した前方に、横八十七センチメートル、上中下段の間に各一センチメートルをあけて縦に札三枚が並ぶ範囲を定め、各々の陣とする。
その各々の陣の外周の各辺を競技線とよぶ。
双方の陣の上段の間隔は三センチメートルとし、左右の競技線の延長線は一致させる。
- 第七条 暗記時間 競技者が持札を並べた後、競技を開始する前に、十五分間の暗記時間をとる。
- 第十条 取りの成立 出札が競技線内にあるうちに、対戦者より早く有効手で直接触った者が出札を取ったものとする。（札直接の取り）
また、共に札直接の取りではなかった場合でも、出札を完全に有効手で競技線外に押し出したときは、その札を取ったものとする。（札押しの取り）
- 第十四条 お手つき 出札が無い方の陣の札を、その札が競技線内にあるときに有効手で触れた場合、これをお手つきとする。
- 第十六条 送り札 対戦者の陣にある出札を取った場合、もしくは、対戦者がお手つきをした場合、自己の持札一枚を対戦者に送ることができる。
また、出札が双方いずれの陣にもない時に、対戦者が両方の陣の札にお手つきをした場合は、二枚送ることができる。

如何でしょうか？ 実際の状況を見なければピンと来ない、と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、ところで、日本では今まで、「百人一首」や「競技かるた」に関する解説本が、山のように出版されてきました。それらも非常に参考になるのですが、本日は、インターネット上で手軽に見られる資料の中から、私が初心者にもわかりやすいと思うものを、皆様に御紹介させていただきます。それは「埼玉県かるた協会」編の『競技かるたハンドブック』（2009年10月発行）で、日本語以外に英語や中国語（但し簡体字版）等の外国語版もあり、説明が絵や写真入りでわかりやすく、しかも「競技かるたハンドブック各国語版は個人の使用については、著作権フリーです。ご自由にダウンロードしてください。配布してください。」というのが、非常にありがたいです。皆様にも、大いに御参照いただきたいと思います。

<http://karuta.game.coocan.jp/download.html>

<http://karuta.game.coocan.jp/handbook%20j.pdf>

<http://karuta.game.coocan.jp/handbook%20cn.pdf>

3. 重要な「決まり字」

ここまでの説明で、「競技かるた」について、ある程度ご理解いただけたでしょうか？ ところで、実際のかるた競技の場ではルールやマナーの他にも重要なポイントがあります。それは「決まり字」です。『競技かるたハンドブック』の説明によれば、「**決まり字とは、「上の句のここまで聞けば、『〇〇の札だ！』と分かる音のことです。つまり、決まり字まで覚えていれば、一首を丸々覚えている必要はありません。**」

(13 頁) とのことです。私は先程、「競技かるた」では「基本的に、百枚の札を全て覚えていることが前提となる」と述べましたが、「百首の和歌を」とは言いませんでした。即ち「競技かるた」では日本語の音声を聞いて反応することが重要なのであり、その際に和歌の意味はほとんど気にする必要がない、とも言えるわけです。「意味を気にしなくてよい」というのは、日本語学習の観点からして、如何なものでしょうか？ とはいえ、考えてみますと、「百人一首」は日本語とは言っても古文で詠まれた詩歌ですから、現代の日本人にとっても、解説なしに意味がすぐわかるというような代物ではないはずです。勿論、私は寧ろ、もともと詩歌としての「百人一首」に惹かれてその世界に入っていった人間ですから、歌の意味などどうでもいい、などと思うはずもありません。ただ、詩歌というのは、日常会話の言葉のようにその場その場で意味が確定されるようなものとは違って、個々の作品がそれぞれ独自の音とイメージを持っており、それらを覚えていると、当てはまる状況に応じて多様な意味と共に立ちのぼってくるものであるような気がします。歌の意味は、わからないよりはわかった方がいいのは確かですが、最初から意味にこだわるより、その音声を体の中に通過させることが、何より大切なのであり、日本語の音声に慣れて、できるだけ早く平仮名の文字と結びつける訓練として、「百人一首」のかるたは、〈日本古典文学〉を学ぶような上級学習者以上に、日本語学習を開始してからまだ日の浅い初級学習者にこそ相応しい側面を持っているのではないかと考える今日このごろです。(これについては、別に目下正確な根拠がデータとして抽出できているわけではありません。もしできることなら、何らかの方法で客観的に論証できたら、と思います。)

それで「決まり字」ですが、これについても差し当たり『競技かるたハンドブック』が参考になります (34-41 頁)。

一枚札：む、す、め、ふ、さ、ほ、せ

二枚札：う、つ、し、も、ゆ

三枚札：い、ち、ひ、き

四枚札：は、や、よ、か

五枚札：み

六枚札：た、こ

七枚札：お、わ

八枚札：な

十六枚札：あ

まずは、このような分類を頭に入れて、次に、二枚札以下の各札の「決まり字」を覚えて、一枚一枚の札と結びつけていくのです。その際に、『ハンドブック』の 14 頁以下にあるような「語呂合わせ」による暗記方法が、面白くて効果的でしょう。また、こうした覚え方は唯一の方法があるわけではなく、自分で覚えやすいと思うやり方で覚えていけばいいのです。例えば、一枚札の「む」ですが、

むらさめ つゆ ひ まき は きりた のぼ あき ゆふぐ
 村雨の 露もまだ干ぬ 真木の葉に 霧立ち上る 秋の夕暮れ 寂蓮法師

私はこれを、下の句が「きり」(実際には「き」のみ)で始まっているのはこれ一首だけですので、「霧」と、その音読みの「ム」の音声を結びつけて覚えました。

そうは言っても、仮に先生方が、一年に一回の授業だけでかるたを取り上げたい、特に、学習者が興味を持ってくれるかもしれない『ちはやふる』と関連づけて、できれば「競技かるた」のような早取りを体験してもらいたい、とお考えになった場合、もしも「決まり字」を一枚一枚教え込んでいたら、それだけで、その日の授業時間は終わってしまうことでしょうか。ならばどうするか、ですが、ここに強い味方が存在します。かるたの札の製造元と言え、田村將軍堂や、寧ろゲームで有名な任天堂など、いろいろありますが、その中で、「競技かるた」の公式大会に用いられる札を作っている大石天狗堂が、『百人一首 きまり字かるた』という製品を発売しています。これは、一般的なかるたの札の表面に、薄い赤文字でそれぞれの「決まり字」を印刷してあるというもので、まだ「決まり字」を覚えていない「競技かるた」初心者のために使われますが、もし学習者にあらかじめ「決まり字」の原理を教えておけば、その場で直ちに「決まり字」を見ながら札を取ることができるのです。私は本日これを二組用意しましたので、この後のワークショップで先生方に実際に体験していただこうと思います。但しこれは「決まり字」も歴史的仮名遣いなので、どうか御注意ください。

あはぢ⇒アワジ	あはれ ⇒アワレ	あひ ⇒アイ
あふこ⇒オーコ	おほけ ⇒オーケ	おほえ ⇒オーエ
こひ ⇒コイ	なにはえ⇒ナニワエ	なにはが⇒ナニワガ
やへ ⇒ヤエ	ゆふ ⇒ユウ	(その他:「を」⇒「オ」)

4. 日本語教室活動の中に「百人一首」かるたを取り入れるには

以上のように、この『きまり字かるた』は、事前に学習者に対して「決まり字」の表を配布し、どんな札があるか目を通しておいてもらえば、恐らく一回だけの授業で、「競技かるた」そのものではなくても、それにかなり近い体験を味わってもらえるのではないかと思います。(その際、札を並べ終えてから、「決まり字」表を片手に3～5分間程度の「暗記時間」を設けるといいでしょう。)勿論、特に「競技かるた」にこだわらなければ、私がこれまで〈日本古典文学〉の授業の中で行っていたように、『きまり字かるた』ではない普通の札を用い、和歌の下の句まで詠まれてから探す、というふうにしても、何ら問題ないわけなのですが、本日は、最近サブカルチャーを通して台湾でも増えつつある、「競技かるた」に対する日本語学習者の関心に応える、

という目的に合わせて、お話しさせていただいています。ごく単純化すれば、**「決まり字」を意識するか否かが、一般の「百人一首」のかるた遊びと、「競技かるた」に進む道とを分ける**、とすることができます。

ところで、「競技かるた」であってもなくても、かるたを取る時には一人の「読手」が必要となります。教室活動でしたら、やはり先生自身が読手を務めることになるでしょうが、もし「どう詠んだらいいかわからない」と思われるようでしたら、読みを録音した「百人一首」のCDやネット上のアプリ等もありますので、それを使われることをお勧めします。中でも私が本日ここで御紹介するのは、奥野かるた店から発売の、『小倉百人一首 敷島』とあって、「競技かるた練習用」と「鑑賞用」の二枚組になっているCDです。二枚の違いは、「競技かるた練習用」が和歌の下の句を一回しか詠まないのに対して、「鑑賞用」は下の句を二回、間隔をあけて詠んでくれるので、一度目の下の句で、札を探したり、取った札を確認したりできます。また、これらはどちらも、プレーヤーのランダム機能を使えば、実際の試合のように毎回異なる順番で札が詠まれることとなります。因みに、この『敷島』の読手は、「競技かるた」の公式大会での「専任読手」の一人である稲葉修至氏が務めています。稲葉さんは、アニメ版『ちはやふる』にも読手として出演されている、私の出身高校の先輩です。

さて、「百人一首」は確かに、現代まで数百年間も生きてきた日本文化の一つであるわけですが、日本語教室活動の中で用いる場合、ネックになるのが、「歴史的仮名遣い」の問題かもしれません。戦後の70年間、日本の社会では基本的に「現代仮名遣い」を使用し、私たちが携わる日本語の教学もそれに合わせてなされてきています。別に、日本で「百人一首」のかるたをしている小学生が、仮名遣いに混乱を来したという話は聞きませんし、それはもしかすると、濁点もない「歴史的仮名遣い」で印刷された和歌が、独特な詠みの音声と結びついているためかもしれません。皆様の中で、もし特に初級学習者への仮名遣いの混乱を懸念される方がいらっしゃいましたら、2011年に幻冬舎エデュケーションから発売になりました、『はじめての百人一首』というものがあります。これは、現代歌人の天野慶さんが、もともと御自身の小学一年生の娘さんのために考案し、その妹の天野美雨さんがイラストを描いたとのことで、百首の中から30首のみの選定ではありますが、和歌の内容を反映させた**絵が取り札に描かれていること**、読み札も取り札も共に「現代仮名遣い」で表記されていること、そして**取り札には上の句の最初の一文字が**ヒントとして示されていること（但し、例えば「あ」の札は全16枚中で「あき(の)」「あし」「あまの」「あまつ」「あら(ざ)」の5枚が選ばれていますので、ヒントだけ聞いて取れるというわけではありません。）、という画期的な特色があるだけでなく、**読み札と取り札に歌の作者の絵が同じ服装で描かれている**ため、取る時に読み札の絵を提示すれば、例えば学習者が平仮名も読めない日本語未経験者であっても、絵を見ただけで一致する札を取ることが可能となるのです。尤も、この商品の弱点は、札が30首分しかないことと、そのためにCDも使えないことで、もし先生方の中でこれを使われる場合には、御自身で読手を担当していただくほかありません。

因みに、同じ幻冬舎エデュケーションから 2013 年に発売されました、この商品の姉妹品『みんなの百人一首』（考案：天野慶、イラスト：天野美雨）でしたら、同様の原理で、取り札にも百枚全て絵が入っているため、『はじめての百人一首』のように、絵を見れば文字が読めなくても札を取ることができます。実際、本学のかるた部を見学に来た、日本語を全く知らない一人の学生に、絵を見せながら取ってもらったところ、かなり早く取っていたので、私もびっくりしました。但しこの商品は、取り札の文字が普通の札と同じく濁点のない「歴史的仮名遣い」表記で、また、ヒントになる上の句の一文字目も書かれていないため、『はじめての百人一首』と比べて一長一短というところです。とはいえ、『はじめての百人一首』でも『みんなの百人一首』でも、和歌の内容が取り札の上に視覚化されているというのは、古典文学作品の理解への道標として、その意義は大きいと思います。のみならず、これら二つの商品には、和歌の意味を、直訳ではなく簡潔な表現で示した「歌人たちのきもち」「歌に込めた思い」という附録が付いており、これがなかなかわかりやすいのです。

あしびきの ^{やまどり} 山鳥の尾の ^を しだり尾の ^を ^{ながなが} 長々し夜を ^よ ひとりかも寝む ^ね 柿本人麻呂

「ひとりで寝るのは、さみしいなあ」（『はじめての百人一首』）

「長い長い夜。君と離れてひとりで寝るのは、さみしいなあ」（『みんなの百人一首』）
 はな ^{いろ} 花の色は ^{うつ} 移りにけりな ^わ いたづらに ^{みよ} 我が身世にふる ^ま ながめせし間に 小野小町

「としをとるのは、いやだわ〜」（『はじめての百人一首』）

「いつしか花の色は変わってゆく。年をとってゆくのね、私も」（『みんなの百人一首』）

和歌の正確な意味との近さという点では、『みんなの百人一首』の方が上かもしれませんが、短い言葉で歌の心を的確に言い表した『はじめての百人一首』の方も棄て難いものがあります。文学作品としての「百人一首」へのアプローチということでしたら、台湾なら先程の張蓉蓓先生訳注『百人一首』も、先生方が参考にされるなり、学生に紹介するなり、できるでしょうから、それも視野に入れた上で、その前段階でこの附録を利用すれば、初中期の日本語学習の一助にもなるのではないかと思います。

思い返せば、『ちはやふる』にせよ、『はじめての百人一首』や『みんなの百人一首』にせよ、ここ数年の「百人一首」をめぐる状況の変化には驚くばかりですが、本日の私の話も、それらがあってこそできたものです。台湾で日本語に関わる方の一人でも多くが「百人一首」に関心をお持ちくださるよう願っています。有難うございました。

参考映像：第 57 期・第 58 期クイーン戦（2013 年・2014 年 1 月、近江神宮）

<https://www.youtube.com/watch?v=pwjRb-9dsD0>

<https://www.youtube.com/watch?v=vXiJn-iQGWE>

参考文献：

- ・渡辺令恵 監修（2012）『DVDでわかる百人一首 競技かるた必勝のポイント』メイツ出版
- ・（社）全日本かるた協会 監修（2013）『かるた大会で勝つ！「百人一首」』メイツ出版
- ・楠木早紀（2013）『瞬間の記憶力 競技かるたクイーンメンタル術』PHP 新書